

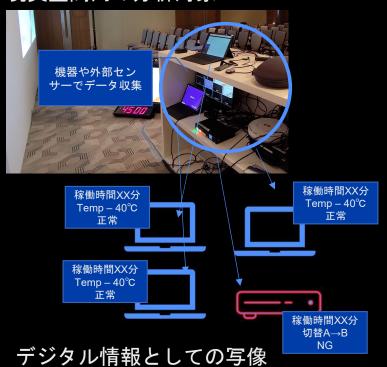
Mixed Realityを活用したIoT Edgeの管理と情報可視化による「Digital Twins」の実現



Digital Twinsとは

実データを活用してより精度の高いシミュレーションを実現

現実空間内の分析対象



例:配信時の機器情報を可視化し改善する

【従来】

- ✓ 対象をモデル化
- ✓ 仮想化したモデルパラメータを変更
- ✓ 状態を分析

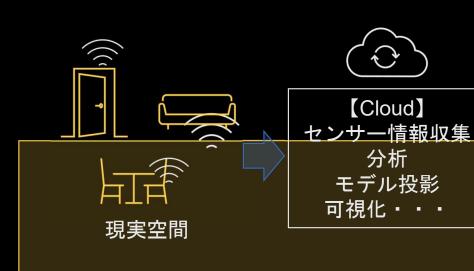


【デジタルツイン】

- ✓ 対象をモデル化
- ✓ 対象にセンサーなどを設置や取り付け
- ✓ 実データを取得しモデルに情報を反映
- ✓ リアルタイムに状態を分析

XR技術とDigital Twins

可視化にはxR技術を活用



今回対象とする活用方法

VR空間

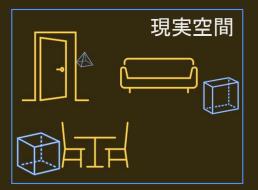
(VR)

すべてをデジタル情報で再現

- ✔ 俯瞰視点での確認
- ✓ 現物確認が困難

(活用例)

- 管理センターでの業務
- 製品開発



[AR/MR]

情報を現実空間に投影

- ✓ 現地での確認
- ✓ 現物確認が可能

(活用例)

- 機器メンテナンス
- 営業

本日のテーマ

情報の可視化を現実空間で実施

機器メンテナンスを想定。対象機器特定/センサー情報を補助空間に出力



検証に利用した技術の紹介

デモと活用方法に関する考察



概要

簡単なモデルケースを実際に構成

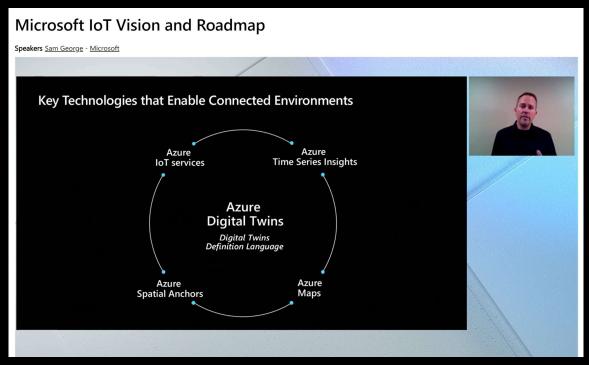
- ✓ 現実空間内にセンサーを設置
- ✓ センサー情報をクラウドを活用してデータを収集
- ✓ 収集データから作業指示などの情報を"センサー近傍で出力"



Azureで実現できるDigital Twins

~ 提供サービスと役割~

Microsoft Build 2020で紹介されていたIoT戦略とロードマップ

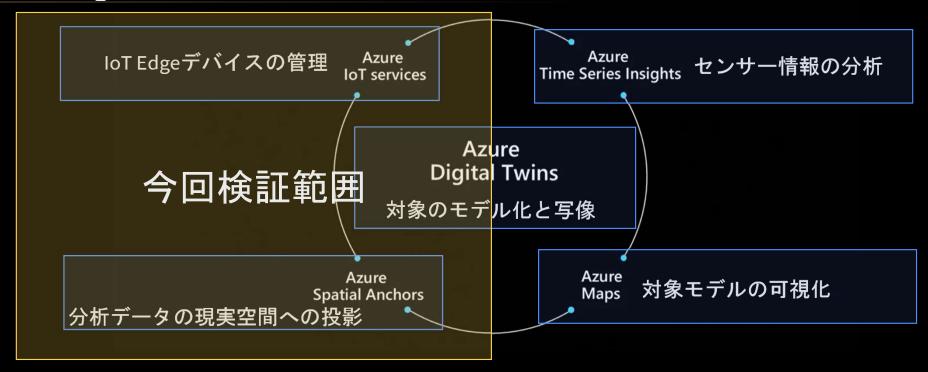


引用元:「Microsoft Buile 2020:Microsoft IoT Vision and Roadmap」https://mybuild.microsoft.com/sessions/007295e3-c677-488c-b5df-6dad2a0f90cc,May 21 2020

Azureで実現できるDigital Twins

~ 提供サービスと役割~

IoT Edgeデバイスの管理から可視化までをサポートするサービスの提供

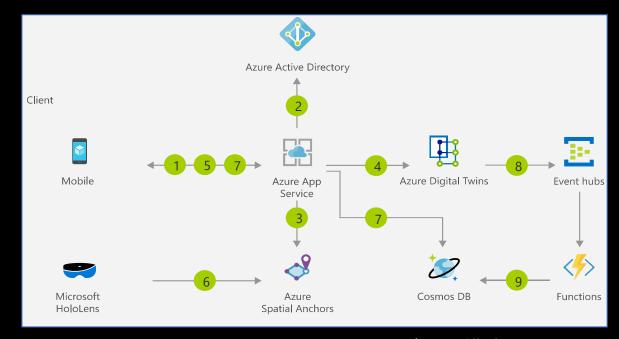


Azureで実現できるDigital Twins

~ 参考アーキテクチャ~

Azure Architecture Center:「複合現実と IoT による設備管理の促進」

https://docs.microsoft.com/ja-jp/azure/architecture/solution-ideas/articles/facilities-management-powered-by-mixed-reality-and-iot?WT.mc_id=MR-MVP-5003104

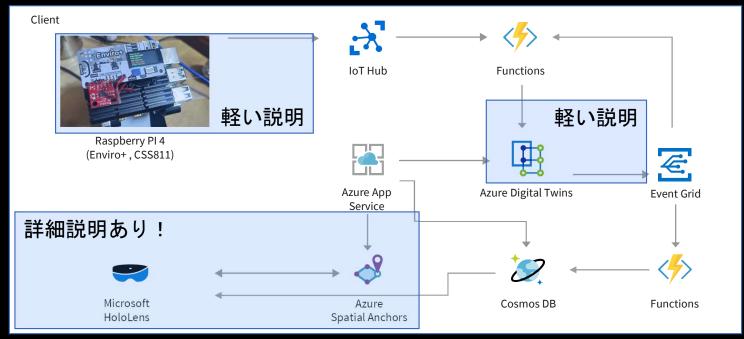


このアーキテクチャをベースにサービスを構成

システム構成

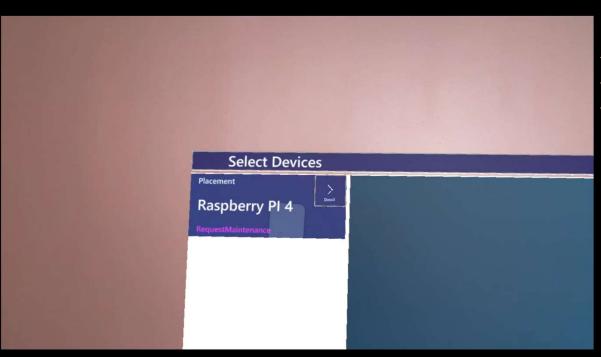
空気環境情報をセンシングするデバイスを空間に設置

- ✓ Azure上で情報を管理(Azure IoT Hub,Azure Digital Twins,CosmosDB)
- ✓ 現実空間のセンサー位置をAzure Spatial Anchorsで管理
- ✓ 必要な情報(対象センサー位置、センサー生データ等)の現実空間での可視化

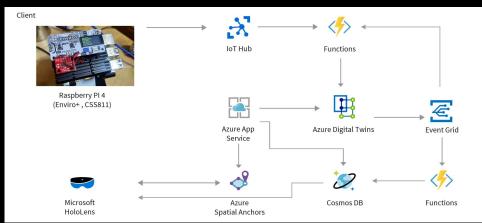


DEMO

確認対象のセンサーの位置特定とメンテナンス



- ✓ Azure Spatial Anchorsによるセンサー位置の特定
- ✓ センサー/作業情報を取得し可視化
- ✓ メンテナンスの報告



IoT Edgeデバイス

IoT EdgeデバイスはRaspberry PI で簡易的に作成

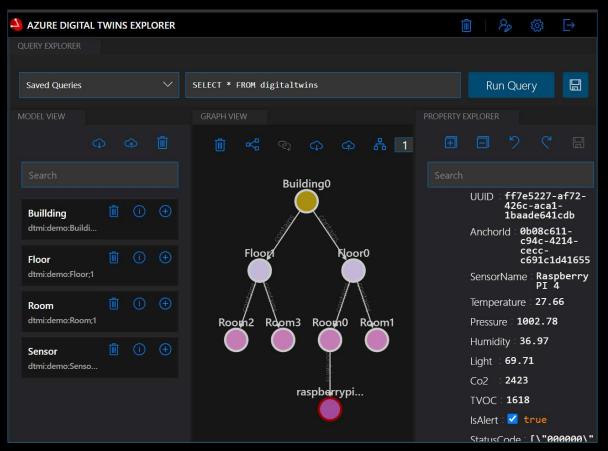


Raspberry PI 4

- ✓ センサー情報 温度、湿度、気圧、照度、Co2濃度等
- ✓ Azure lot HubとはNode.js用のライブラリを経loTHubのサンプルをほぼ流用
- ✓ iBeaconとしてBluetooth機能を利用 Azure Spatial Anchorsの利用で必要

Azure Digital Twins(Public Preview)

~ 分析対象をモデル化し写像を管理 ~



情報はJson形式で記述

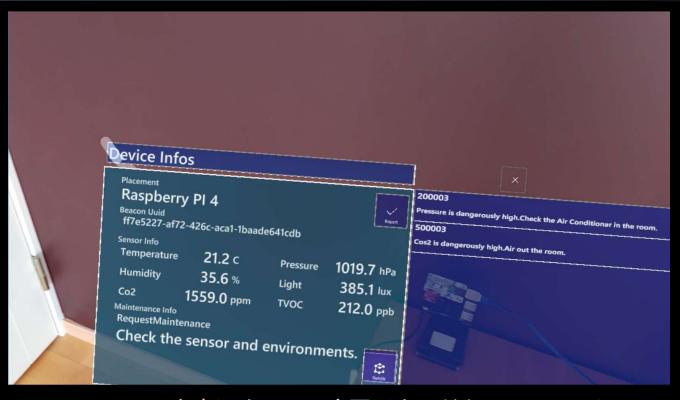
- ✓現実世界の情報をモデル化
- ✓モデル化したデータの写像を生成
- ✓ノードモデルとして管理
- ✓写像データの管理
 - ✓ CRUD
 - ✓ トリガー

今回は以下の機能を付与

- ✓ IoT Hubからの情報を反映
- ✓ 変更をトリガーにCosmosDBを更新

HoloLens 2での可視化

Microsoftの各種MR系サンプルは MRTK V2.4.0+Unity 2019.4 (MRTKのgithubに記載)



- HoloLens 2での利用機能
 - ✓ ハンドトラッキング
 - ✓ 空間マッピング
- Mixed Reality Toolkit V2.5.1を使用 (Package Manager経由)
- ■主な利用機能
 - ✓ Button
 - ✓ ProgressIndicator
 - ✓ Elastic System
 - ✓ Hand Menu

(参考)少しのUI変更(今回だとHand Menu)でAndoroid,iOSにも対応可能 ※MRTK、Azure Spatial Anchorsがクロスプラットフォーム対応のため

可視化にあたってのポイント (要件)

センサーの現実空間での位置の把握が必要

✓どのセンサーを対象とするか特定が難しくなるため



今回はAzure Spatial AnchorsのCoarseRelocationを活用 【理由】QRコード等のマーカなしに、現実空間にアンカー設置が可能

~ Coarse Relocation ~

センサー情報を利用してSpatial Anchorの問合せが可能

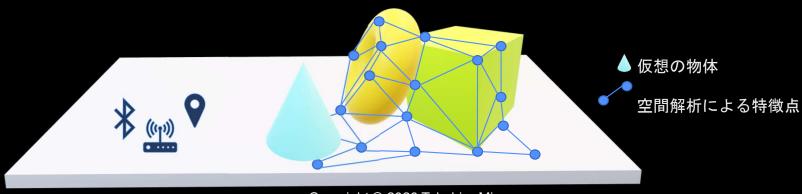
- ✓ 「空間の特徴」
- ✓ 「位置情報(=アンカー)」
- ✓ 「デジタル情報」
- ✓ 「センサー情報」 (Wifi/GPS/Beacon)



クラウドで管理(IDで管

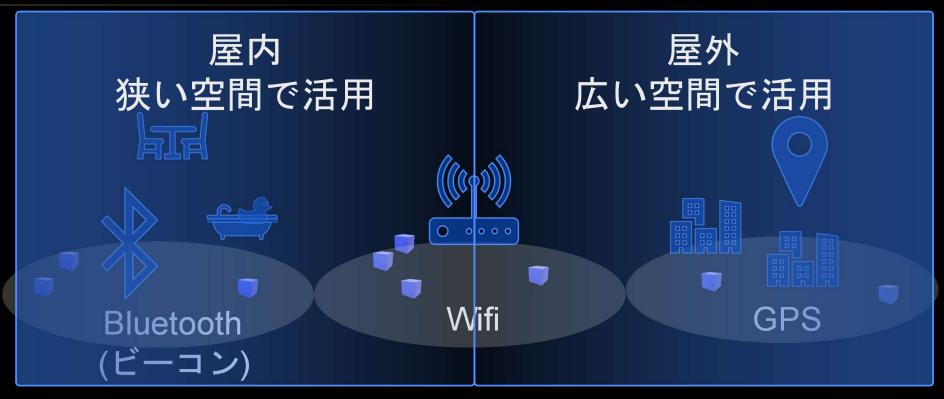
理)

- ✓ クロスプラットフォームで活用
- ✓ 共有体験の土台



~ Coarse Relocation – センサーの使い分け ~

有効範囲によって使い分ける



~ 各デバイスのサポート状況 ~

有効範囲によって使い分ける

https://docs.microsoft.com/ja-jp/azure/spatial-anchors/concepts/coarse-reloc?WT.mc_id=MR-MVP-5003104

センサー種別	HoloLens	Android	iOS
GPS	× 機能なし	O APIサポート	O APIサポート
Wifi	〇 3 秒ごとに約 1 回のス キャン	O API レベル 28 以降スキャ ンは 2 分毎に 4 回の呼出に 調整。 Android 10 からは 調整可能	× なし
BLE Beacon	O Eddystone iBeacon		

~ IoT EdgeデバイスのBeacon化が必要な理由 ~

Beaconとして機能させることで、Coarse Relocationが利用可能



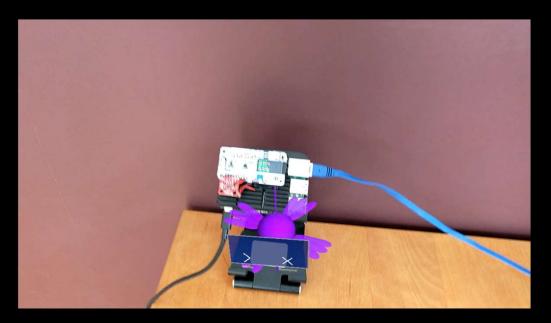
Raspberry PI 4

- ✓ センサー情報 温度、湿度、気圧、照度、Co2濃度等
- ✓ Azure lot HubとはNode.js用のライブラリを経 IoTHubのサンプルをほぼ流用
- ✓ iBeaconとしてBluetooth機能を利用 Azure Spatial Anchorsの利用で必要

センサーに紐づくSpatial Anchorを生成可能 センサーの位置関係を管理可能に!



~ 実装手順 ~



以降はBluetoothを利用したアンカー制御の実装を解説

- アンカーの登録
- アンカーの検索
- アンカーの削除

Azure Spatial Anchorsはアンカー制御用にSDKが提供

- ・クロスプラットフォーム
- Unity向け

今回のデモシステムはGithubで公開(詳細を確認したい方は参考にしてください。) https://github.com/TakahiroMiyaura/DigitalTwinsDemoSystem

(参考)開発環境

HoloLens 2 & Azure Functions

- ✓ Windows 10 Pro
- ✓ Unity 2019.4.10f1
- ✓ Mixed Reality Toolkit V2.5.1
- ✓ Azure Spatial Anchors V2.6.0
- ✓ Visual Studio 2019(16.5.3)

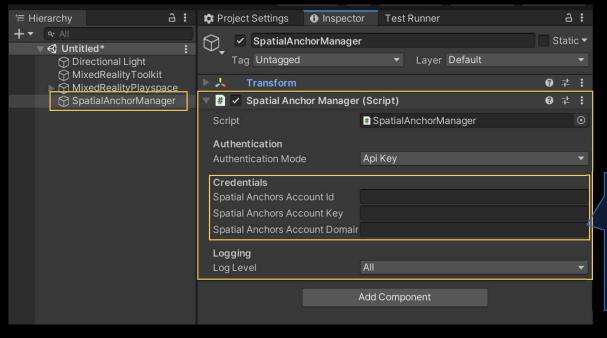
IoT Edgeデバイス

- ✓ Visual Studio Code 1.50.1
- ✓ Plugins: Azure IoT Hub(動作確認用),Remote Development
- ✓ Node.js: v8.11.3(Raspberry PI Beacon化 v10.13.0(Azure IoT Hubとの連携)
- ✓ Python:3.7.3(センサー情報収集、Json化)

~ 基本的な事項~

Azure Spatial Anchorsサービスの導入はPackage Manager経由

詳細な手順はhttps://docs.microsoft.com/ja-jp/azure/spatial-anchors/how-tos/setup-unity-project?WT.mc_id=MR-MVP-5003104&tabs=UPMPackage



- 空GameObjectを追加
- Spatial Anchor Manager <u>コンポーネントを追加</u>

Azure Spatial Anchorsの利用に必要な情報を設定

「左記項目に入力」 または 「リソース設定」

※リソースファイルは以下に格納されている Asset/AzureSpatialAnchors.SDK/Resources/SpatialAnchorConfig

~ 基本的な事項 - 機能系(1/3)~

Azure Spatial Anchorsとの接続と利用定義に関する部品

- SpatialAnchorManager.CreateSessionAsync [メソッド]Azure Spatial Anchorsとの接続に必要なセションを生成
- SpatialAnchorManager.StartSessionAsync [メソッド]Azure Spatial Anchorsとと接続しセションを開始
- NearDeviceCriteria [クラス]デバイス(センサー系)利用時のルールの定義
- PlatformLocationProvider [クラス]センサー(Beacon,Wifi,GPS)の有効/無効の定義

~ 基本的な事項 – 機能系(2/3) ~

アンカーの設置

- SpatialAnchorManager.CreateAnchorAsync 指定のオブジェクトをSpatial Anchorをサービスに登録
 - ✓ 空間に配置したGameObjectをアンカー情報として周辺の空間情報と共に登録
 - ✓ センサー情報も登録する場合はCloudSpatialAnchorSessionに設定必要

アンカーの削除

■ SpatialAnchorManager.DeleteAnchorAsync 設置済みSpatial Anchorをサービスから登録

~ 基本的な事項 – 機能系(3/3) ~

Azure Spatial Anchorsへのアンカー問合せと設置に関連する部品

- AnchorLocateCriteria [クラス]Spatial Anchor設置ルールを定義
- CloudSpatialAnchorSession.CreateWatcher [メソッド]Spatial Anchor設置指示
- SpatialAnchorManager.AnchorLocated [イベント]サービスから取得したSpatial Anchor設置時に発生
- SpatialAnchorManager.LocateAnchorsCompleted [イベント]サービスから取得したSpatial Anchorすべてを設置後に発生

~ 基本的な事項 - 設定系(1/2)~

Corse Relocalizationのための設定

NearDeviceCriteria: センサー情報の有効範囲を定義

- DistanceInMeters
 - ✓ センサー位置を中心として有効範囲(半径m)
- MaxResultCount
 - ✓ 一度に検出するSpatial Anchor数

~ 基本的な事項 - 設定系(2/2)~

Corse Relocalizationのための設定

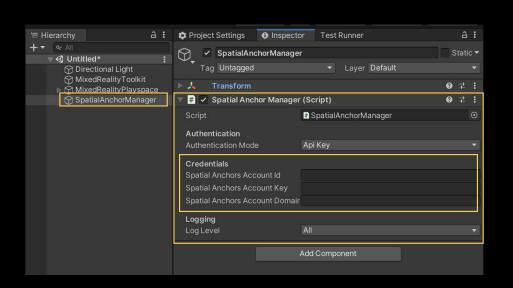
PlatformLocationProvider: センサーの利用条件を設定

- GeoLocationEnabled
 - ✓ GPS情報を利用するかどうか
- WifiEnabled
 - ✓ Wifi情報を利用するかどうか
- BluetoothEnabled
 - ✓ Bluetooth (ビーコン) を利用するかどうか
- KnownBeaconProximityUuids
 - ✓ ビーコンを利用する場合のUUIDのホワイトリスト

~ 実装:セションの開始~

セションの生成と開始を実施

//セッションの開始 await CloudManager.CreateSessionAsync(); await CloudManager.StartSessionAsync();



Azure Spatial Anchorsサービスへの接続はCredentials Or リソースから取得 Asset/AzureSpatialAnchors.SDK/Resources/SpatialAnchorConfig

~ 実装:検索の実施(1/4)~

イベントの定義

SpatialAnchorManagerのイベントにメソッドを割り当てる

//イベントの設定

SpatialAnchorManager.AnchorLocated += AnchorLocated;

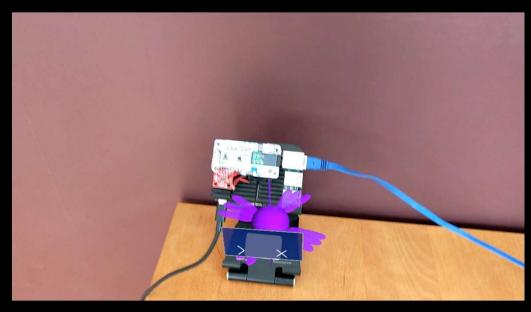
SpatialAnchorManager.LocateAnchorsCompleted += LocateAnchorsCompleted;

SpatialAnchorManager.LogDebug += LogDebug;

SpatialAnchorManager.Error += Error;

~ 実装:検索の実施(4/4)~

アンカー検索の実施(非同期)



一般語彙的解析の設定 Provider.Sensors.GeoLocationEnabled = false; provider.Sensors.GeoLocationEnabled = false;

- = r指定Alachulus合致では登録済みSpatial Anchorを検索の問題のなるででは必要を表するとなる。
- = nearDeviceCriteria; spatialAnchorManager.AnchorLocated
 - ✓ SpatialAnchorManager.LocateAnchorsCompleted

~ 実装:登録~

Spatial Anchorの登録

通常のGameObjectで位置決めを実施



```
// アンカー情報の取得
CloudNativeAnchor cna =
spawnedObject.GetComponent<CloudNativeAnchor>();
if (cna.CloudAnchor == null) { cna.NativeToCloud(); }
CloudSpatialAnchor cloudAnchor = cna.CloudAnchor;
//アンカーの寿命を設定(検証では有限に!)
cloudAnchor.Expiration = DateTimeOffset.Now.AddDays(7);
//アンカーの登録
await CloudManager.CreateAnchorAsync(cloudAnchor);
```



現実空間にセンサー情報を可視化する意義

作業支援として一定の効果はあると考えられる

- ✓ センサー情報+現実空間(空間認識など)を組合わせるデジタルツインも可能
- ✓ 現物確認が必要なシチュエーションでは可視化による効率化が可能



現実空間にセンサー情報を可視化する意義

<u>デジタル空間でのセンサー位置の管理の実現</u>



Azure Spatial Anchorsにより現実空間のセンサー位置をUnityの座標系で管理 設置センサーの後付けや移動による座標情報までDigital Twinsで管理が可能

本日のテーマ

情報の可視化を現実空間で実施

機器メンテナンスを想定して対象の特定、センサー情報を補助空間に出力



Azure Spatial Anchorsを中心にDigital Twinsを実現する手段の紹介

デモの紹介と考察

